

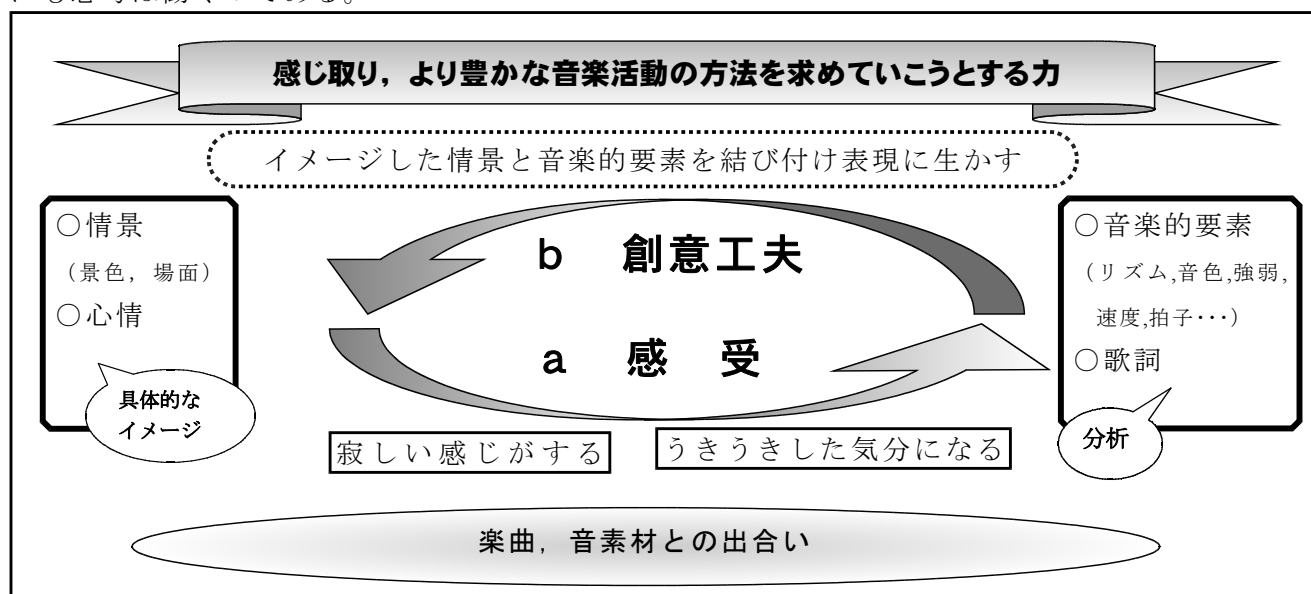
音 楽 科

1 育成したい「思考力」

- a 楽曲や音のもたらす気分や内容から，表す情景を想像したり，特徴付けている要素を感じ取ったりする力。
- b より豊かな音楽活動の方法を求めて，感じ取ったことを基にして自ら創意工夫していこうとする力。

音楽科が捉える「思考力」とは，楽曲や音を通して感じ取ったことを基にして，より豊かな音楽活動へと高めていこうとする力である。このことは，感受することを出発点として，表現するための工夫や，鑑賞の工夫へと展開していく力とも言える。

この「思考力」の観点は，学習指導要領では，「音楽的な感受や表現の工夫」と示されている。表現領域のみならず鑑賞領域においても，音楽を感じ取る活動として「音楽的な感受や表現の工夫」が大切となる。感受したことを基に楽曲の構成要素を感じ取ったり，特定の楽器の音色の響きを感じ取ったりするなど，聴く観点を明確にしながら鑑賞の仕方を工夫するところにも思考は働くのである。



a 「感受」する力とは

楽曲や音から音楽的な要素や歌詞の構成を基に，その背景にある情景や心情といった具体的な像を描く力である。

例えば4年生の教材「とんび」を歌唱表現する場合，3フレーズ目のとんびの鳴き声「ピンヨロー」の歌い方について歌詞と旋律，速度などの音楽的要素から子どもたちは曲想や場面を捉える。そして，歌詞の中で鳴き声が4回続いている部分を取り上げ，とんびが飛んでいる情景を思い浮かべる。その時，「音程が高い→低い→高い→低いと変化しているので，二羽のとんびが話している感じがする。」という旋律の動きからイメージをしたり，「1回目が強く2回目が弱く感じたのでとんびがだんだん山の向こう側へ飛んで行くようだ。」というように，強弱からイメージを広げていったりする。これがaの「感受」についての思考である。

b 「創意工夫」する力とは

感受したことを基に、より豊かな音楽活動を求めてイメージと音楽的要素が結び付いた表現へと高める力のことである。

同教材「とんび」において、感受したことを基に、よりよい表現の工夫を考えていく。「とんびが輪を描いて話しているように、強い弱いを繰り返して歌おう。」とか「だんだん山の向こうへ飛んでいくように、だんだん弱く歌おう。」というように場面を想像し、それと音楽的要素を結び付けながら4回の鳴き声をどのように歌うか工夫していく。また、自分がとんびになったつもりで歌ったり、下からとんびを見上げているイメージで歌ったりするなど、場面や気持ちによっても、イメージした情景を表現に生かそうとする。これが、bの「創意工夫」する思考である。

aとbはそれぞれ独立したものではあるが、上記の例に示したように、音楽活動を進めていく中で、常にどちらも必要となる。つまり、楽曲や音素材を通して子どもたちは様々な情景を感受し、自分なりの表現へと高めていく。その時、情景と音楽的要素を結び付けながら、より豊かな音楽活動の方法を見出していくのである。

そして、aとbの「思考力」を相互に発揮しながら、より豊かな音楽活動が進められていくのである。

2 「思考力」を育成する授業づくり

実践事例（第4学年）

「詩から感じる音楽を表現しようー様子を思い浮かべてー」

学習指導者 くめ あや
久米 亜弥



（1）単元について

① 育成したい「思考力」

詩の表す様子から受ける場面の様子や気持ちを基に、それらのイメージに合った楽器の音色や速度、高低、重ね方などを考えながら、表現の仕方を工夫する。

② 「思考力」を育成するための教材開発

中学年では低学年で進めてきた活動内容をさらに広げ、さまざまな音やリズムの組み合わせを工夫したり、自分の思いやイメージを基に、音を選んで表現したりする活動を通して、自己表現への意欲を高め、音楽に対するイメージを広げていくことが大切であると考え。しかしながら、これまでの音楽づくりは、音を音楽に発展させるという視点が十分でないものが多かった。例えば、「お話に音楽を付けよう」という活動では、ただ擬音・擬態語を付けて終わってしまうものが多かった。つまり、実際に存在している物音を模倣した時点で子どもたちは満足してしまい、それ以上、場面の様子や気持ちについてイメージを深めることはあまりなかった。これでは、イメージに合った音色や強弱などの音楽的要素の工夫を加え、自分なりの表現へと高めていく活動へ結び付けることは、極めて難しい。

そこで本単元は、詩を基にした音楽づくりを展開する中で、「模倣できない情景を音に表す」

ここでは、詩「あきのひ」(工藤直子作)を取り上げ、「夕日がくるくるとしずむ」様子を、「どんなふうにしずむのかな?」と想像させる。「夕日が沈む」という情景は、それ自体に音がないだけに、音を自由にイメージしやすい。そして、「どんな音だろう?」「音の高低は?」「速さは?」というように自ずと音楽的要素に着目して創意工夫することができる。そして、詩の表す様子から受けるイメージを大切にしながら実際に音に触れ、そのイメージと楽器の音色や速度、強弱、音の高低など分なりのよりよい表現の仕方を見出すことができると考



…心の中にぼんやりとあるものこそ、新たな発明の刺激なのだ。…世の中に対する限られた型通りの見方を壊そうとすると、脳は最も創造性を発揮する。

創造的イマジネーションが広がり始める時期とされる中学年においては、模倣できる情景の音楽づくりよりも模倣できない情景の方が、さらに音色を探ったり表現の仕方を考えたりでき、より豊かな創造性の育成につながると考える。



「夕日がくるくると沈む」という表現は、子どもたちに今まで見たり聴いたりした経験や印象を基に、その情景を（ぼんやりとしてはいるが）イメージさせることができるであろう。夕日の沈む音というのは存在しないために、創意工夫することへの意欲が生ずる。そこで、「どんな音色で?」「どのように演奏するか?」と考えさせることで、子どもたちは自然と音楽的要素に着目しながら表現の幅を広げ、工夫していくことができるだろう。

```

graph TD
    A["<事前評価>  
模倣できる情景と音楽的要素を結び付ける力（動物の鳴き声や、動く様子を、楽器の音色と結び付けることができたか。）  
【ワークシート】"] --> B["○ 想像した気持ちや様子に合った音楽的要素の工夫を考えて表現する。 (本実践 4 / 6)"]
    B --> C["<事後評価>  
模倣できる情景と音楽的要素を結び付ける力（人間の動きや物が落ちる様子を、楽器の音色と結び付けることができたか。）  
【パフォーマンステスト】"]
    B --> D["<実践集団>  
班ごとに、「模倣できない情景」の詩を、様子や気持ちをイメージしながら音楽づくりをしていく。"]
    B --> E["<対照集団>  
班ごとに「模倣できる情景」（波の音や電車の走る音など）の詩を、イメージしながら音楽づくりをしていく。"]
  
```

<事前評価>
 模倣できる情景と音楽的要素を結び付ける力（動物の鳴き声や、動く様子を、楽器の音色と結び付けることができたか。）
 【ワークシート】

○ 想像した気持ちや様子に合った音楽的要素の工夫を考えて表現する。 （本実践 4 / 6）

<実践集団>

班ごとに、「模倣できない情景」の詩を、様子や気持ちをイメージしながら音楽づくりをしていく。

<対照集団>

班ごとに「模倣できる情景」（波の音や電車の走る音など）の詩を、イメージしながら音楽づくりをしていく。

<事後評価>
 模倣できる情景と音楽的要素を結び付ける力（人間の動きや物が落ちる様子を、楽器の音色と結び付けることができたか。）
 【パフォーマンステスト】

(3) 本実践の有効性の検証

① 子どもの様相から

詩「あきのひ」の一部分「夕日がくるくると沈むところでした」を取り上げ、「それを見ている野菊の立場になって想像しよう。」と投げかけた。子どもからは様々なイメージが表出された。それらのイメージは、気持ちから考えるものと、場面の様子から考えるものとに分類された。そこで、どちらの立場に立って音楽づくりをするかを確認した後、気持ちや様子に合う表現の仕方を考えさせた。

「さみしい気持ちがするから、音をだんだん弱くしたよ。」「明日また会えるのが楽しみだから強く叩いたよ。」など、気持ちから強弱の工夫をする子どもたちが多かった。また「まぶしい光がだんだんなくなっていくから音もだんだん弱くしました。」というように、様子からも、強弱の工夫へと結び付ける子どももいた。

他にも「夕日が沈む様子はゆっくりだとイメージしたので、レインスティックをゆっくりと傾けてみました。」「夕日が落ちることから悲しいという気持ちをイメージしたので、音程をだんだん下げました。」というように、速度や音の高低に目を向けて表現を考える子どもも見られるなど、ただ高い音から低い音へと滑らせるのみにとどまらず、イメージに合った音をつないでふしをつくる姿があった。

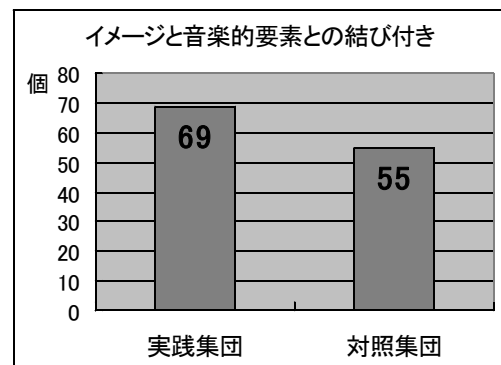
また、2つの音を重ねて表現の工夫をするといった、高学年で大切にしたい「ハーモニーを重視した活動」へと結び付ける子どもも、4名見られた。



② 検証データから

事前評価では、「小さなサルが、高い木の枝から枝へ飛び移りながら下りてきました」という場面の音楽づくりの仕方について質問した。そして、速度や強弱など音楽的要素の工夫と場面の様子とを結び付けた個数について調べた。その結果をt検定を用いて検証したところ、両集団の差に有意傾向は見られなかった。

事後評価では、同じように模倣できる情景（イメージ）と音楽的要素の結び付けについてパフォーマンステストを行った。事前と同様の調査であったが、実践集団では69個、対照集団では55個の関係付けが見られ、実践集団が上回った。この結果に対してt検定を行ったところ、両集団の差に有意傾向が見られた（ $t(66) = 1.86, p < .10$ ）。



③ 考察

これらのことから、実践クラスの方が音楽的要素に着目しながら表現の幅を広げ、工夫することができるという結果が得られた。これにより、模倣できない情景を音に表すという実践は、強弱や速度以外に音の高低や重なりなど、より多くの音楽的要素を加える工夫を広げることに有効であると考えられる。それは、模倣できない情景は明確な答えがなく、子どもの創造力を強く刺激するためではないだろうか。

しかし、授業リフレクションでは、「場面と気持ちに立場を分けているが、子どもたちはどこまで理解できていたか。」「音楽的要素が広がりすぎて、交流場面で視点がぼやけてしまった。」という意見もあり、今後の交流での取り上げ方についての議論がなされた。